

## 或る郷の物語（上）

現役時代に過ごした或る赴任地に、心に沁みた叙事・抒情的な思い出がある。いずれも時代を象徴的に反映した女性である。

### 二人の女性

その地、港街に色を添えた女性が二人いた。

ひとりとは、唐人お吉。

その港街の駅前にある飲み屋で聞いたお吉の悲しい人生に、時代に翻弄された無情を感じた。

駅前の直ぐ近くを稲生沢川（いのうざわかわ）が流れる。その上流に身を投じて人生を締め切ってしまった悲話である。

幕末の芸者・斎藤きちが、「国難を救う」という幕府の要請でアメリカ総領事・ハリスの側妾となって、それからは「ラシャメン（洋妾）」と揶揄されるようになった。

「きち」は、天保十二年（一八四一年）、愛知県知多郡内海に船大工・市兵衛、母・きわの次女として生まれる。幼少のころに下田に移り住むが、やがて父親を失った「きち」は、下田に入港する船の船頭たちの洗濯女として生計を支えることになる。

「きち」が十六才のとき、下田において米国総領事として着任していたハリスが健康を害し、看護婦を要求したのに対して、日本側がこれを拒絶すると、条約が破談となる危機を迎える。

あわてた日本側は、ハリスのもとに「きち」を、オランダ人通訳ヒュースケンのもとに経師屋（きょうじや）平吉の娘「ふく」を仕えさせることとした。「きち」には支度金二十五両、年手当百二十両が報酬として渡される約束となった。（当時の大工の手間賃が年約二十四両程度だったといわれる。）

しかし、「きち」は三夜で暇が出され、玉泉寺通いは終わるはめに。その理由は、「きち」がハリスの世話をしている最中に、腫れ物ができたため、自宅療養を仰せつかったとのことであるが、全快後も玉泉寺でハリスに仕える機会はなかったという。

解雇後のきちは、異人と交わったという偏見により、船頭たちの洗濯ができなくなり、暮らしに困窮して、下田領事館の閉鎖とともに、下田から姿を消してしまふ。

明治元年（一八六八年）、横浜で大工の鶴松と同棲するが、明治四年には下田に戻り、女髪結いを営んだ。しかし、周囲の偏見からか経営も思わしくなく、酒に溺れたこともあって三島へ。明治十五年に再び下田に戻り、小料理屋「安直楼」を営むが、酒に溺れる自暴自棄の生活から、破産に追い込まれ、晩年は物乞いをする生活だったという。

病気を患ったきちは、稲生沢川角栗の淵（かどくりのふち・現在のお吉が淵）に身を投げ、引き取り手のなかったきちの亡骸は宝福寺に葬られた（享年五十歳）。

その哀しい生涯を供養するため、お吉の命日である三月二十七日には、お吉ヶ淵と墓所である宝福寺において、毎年供養祭「お吉祭り」が開催されている（下田市資料参考）。

「もうひとりとは、川端康成・小説の『伊豆の踊子』。

その街の港に立つと、

旧制一高の青年を涙で見送った女性の姿が浮かぶ。

（あらすじ）

修善寺から湯ヶ島、さらに雨の天城峠を越えようとしていた青年が、旅芸人の一行と出会い、太鼓を持つ若い踊子・薫の姿に目を奪われ、彼女たちと同じ宿に泊まりたいと願うようになる。

当初、彼は薫を大人びた女性（遊女のような存在）として見て

しまい、期待と不安を抱いた。しかし、湯ヶ野の温泉宿で、裸で手を振る薫の無邪気な姿を見て、彼女がまだ幼く、汚れのない子供であることを知って、喜びと親近感を覚えるようになった。

彼は一座と行動を共にし、下田街道を南下。一座で薫の兄の栄吉と碁を打ったり、薫の初々しい笑顔に触れたりする内、早くに家族を亡くしたことによる孤独感から自己嫌悪に陥っていた彼の心は素直なものへと変わってゆく。

目的地の下田に到着した。

一行は商売のために残り、彼は一人で東京へ戻る船に乗らなければならなかった。出発の朝、身分の差を感じていた薫は一言も発さず、ただ悲しげな瞳で彼を見送っている。

船上で、彼はとめどなく涙を流した。それは別れの悲しみだけでなく、孤独から解放され、すべてを素直に受け入れられるようになった清らかな涙であった。

小説は、川端康成が十九歳（大正七年）の時に伊豆を旅した際の実験が元になっている。

それから、ざっと七十年余り・・・

その地の半島に、ある大規模リゾートの建設構想が浮かび上がって、現地視察に加わっていた僕は、岬の先端から海を見晴らす広い海景にすっかり心が解放されていた。

先端には、神社があった。

色が飛んで薄赤くなった鳥居の直ぐ後ろに、「山の神」と名入りの祠（ほこり）。気付くと、足元にがさごそと動くものが居る。赤い手を持つ蟹だ。何匹かいるようだった。

やがて、この蟹がドラマを展開する。

（続く）